

寄生虫感染による免疫系の修飾

矢野 明彦

Jpn. J. Clin. Immun., 19 (6) : 577~577, 1996.

寄生虫は数億年に遡るとも考えられる寄生生活の歴史の中で宿主の免疫応答としたたかなバランス関係を築き上げてきた。単細胞（原生類）、あるいは多細胞（蠕虫類）から成る寄生虫が、終宿主内で有性生殖を行い次世代を産生しなければならないという宿命を持つ寄生虫感染は多分に共生關係的、日和見感染症的、慢性感染症的要素を持つように進化してきたといえる。このことから、寄生虫感染特有の宿主免疫応答の修飾がみられる。抗原非特異的な免疫活性現象の例としては、マラリア、アフリカトリパノソーマ、シャーガス病、住血吸虫症における高ガンマグロブリン血症が起こる。また、寄生虫感染による自己反応性免疫応

答の惹起や、寄生虫由来スーパー抗原の報告もされている。また、蠕虫感染によって、好酸球増加、抗原非特異的および抗原特異的血清 IgE の上昇がおき、Th2 優位の反応が起きる。原虫感染では、感染抵抗性宿主における Th1 優位性がいわれている。一方、寄生虫感染による抗原特異的、非特異的免疫抑制も知られている。この免疫抑制にはマクロファージや、T 細胞、B 細胞、抗体が関与している。本シンポジウムでは、我々が行っているトキソプラズマ感染細胞の抗原提示機構の研究結果も加え、寄生虫感染における宿主免疫反応の修飾について問題提起をしたい。